

—だいありい—



「まなびや」

昔の寺子屋のような雰囲気。畳の上で自由にお話ができるよう、座布団や小さな机を用意しておいて、自由に使えるようになっている。

ここでは、小～大学生にわたる多世代の子ども・学生が交わり合う場所。悩みを共有し相談をするなかで、ときには本気でぶつかり合うこともある。

教える・教えらえるの関係性ではなく、人としてかかわっていくことで、これからの人生を生きるうえでの学びを深めていく。

学びを深めるのはおとなも一緒。「あの人こんなことできるの?」「そんなことに興味があったの?」と、いろいろな人生経験をもつ

“おもしろい大人”のお話を聞けたりする。ここに子ども・学生がいてもよくて、学校だけでは学べない人生の知恵や豆知識を学べるかもしれない。

「ながや保育園」

定員10名の小さな保育園はおうちのような、社会のような場所である。

その日のスケジュールは園児自らが考え、決定することで園児の自主性を伸ばす。地域の食文化や手作りのご飯から「食」に対する学びを伝えるために、お昼ご飯は「ちいきのだいどころ」で提供される。

保育園のスペースだけではなく、八百屋さんや魚屋さんに行ったり、「なにもないばしょ」で自由に遊べる。その場所にいる大人との交流から得られる学び・体験は子ども達の成長につながる。保育園は地域の公園とつながっており、公園にいる学生とも一緒に遊ぶことができる。

ながや保育園では保育園の先生が見守るだけでなく、地域のお年寄り、大人、学生など地域全体で子ども達を見守り、支えている。子ども達をきっかけに、地域の安心・安全の輪、交流の輪が広がっていく。

「つくる場」

子どもから大人までつくるでつながる「つくる場」。1人で黙々とつくるもよし、一緒につくる人を募るもよし。編み物や家具、アクセサリ、絵、Webサイト…何をつくっても良い場所。条件は「つくるを共有する」こと。材料や道具は、持ち寄り、みんなでお金を貯めて買う。つくり方がわからない時は、人を募ってつくり方を共有する。

1人でつくるには腰が重い人も、思わず色んなものを作りたくなる、子どもから大人まで想像して創造できる場所。



私たちは、心の落ち着きを感じ、元気がないとき無性に行きたくなる場所が欲しいと考え、3つのキーワードに辿り着いた。

1つ目は、気かけ合える程よい距離感。

干渉しすぎず、無干渉でもない、気かけ合える空間が欲しい。

「いつも見かけるおじいさんがいないね、どうしたのかな?」

そんな風に気かけ合える関係をたくさん築きたい。

2つ目は、世代間の交わり。

現代では、子どもは学校へ、若者は会社へ、高齢者は老人ホームへ、同じ世代で集まり、

他世代と関わる機会がとても少ない。

そのため子どもから高齢者まで同じ空間に居合わせる空間が必要だと考えた。

3つ目は、暮らし。

家庭内の用事がサービス化された現代は、便利だがどこか寂しい。

私たちは、もう一度暮らしを見つめ、自分たちで作り、共有したいと考えた。

そして《程よい距離感で、世代を超えて、暮らしを共有できる》のが長屋だと考えた。

福祉＝施設、福祉＝専門職ではなく、地域にいる一人一人が誰かの福祉であり、

地域のあらゆる所から福祉が繋がっていく。

それぞれが好きなことをしながら、互いの暮らしを共有する。

つくり、つむぎ、つづるように暮らす「だいありい」



「ちいきのだいどころ」

共同キッチンの隣には、食卓を囲えるテーブル席、壁向きにカウンター席がある。

ここは、日中:貸出キッチン、夕方:子ども食堂、夜:日替わりのお店、の3つの顔がある。日中は、料理上手な地域住民たちがその腕を発揮して教室を開く。インターネットには載っていない料理の知恵を知ることができる。夕方は、子どもたちがボランティアさんのつくった料理を食べにくる、そこに学校帰りの学生さん、地域住民の人がきて一緒にご飯を食べる。夜は、仕事帰りの社会人がふらっと深夜食堂にきたり、お酒を嗜む人たちがBarにくる。

温かいご飯を、誰かと一緒に食べることが当たり前ではない大人たち、子どもたちへ、そんな当たり前を地域のなかで自然と感じてほしいという思いがもっている。

「八百屋」「魚屋」「肉屋」

地域の生産者を中心に、近隣のまちでとれた新鮮で美味しい野菜、肉、魚を直接消費者へ届ける。専門店だからこそおすすめする季節の食べ物、素材をいかした美味しい食べ方や献立を提案する。

魚屋は「ちいきのだいどころ」で月に1回魚の捌き方教室を開催し、食の大切さを伝えている。

八百屋を通して、家庭菜園や新しく農業を始めたい人に向けて農地の貸し出しを行なっている。また、保育園の活動や福祉施設でのレクリエーションとして畑作業を行うことができる。

お店にはさまざまな人が来ている。中には一人暮らしのお年寄りや近隣住民との関わりが希薄な人も。そんな人に対してお店にきて、買い物をすることで見守りが行われる。支え合いのネットワークが八百屋、魚屋、肉屋からも広がっている。

「いえ」

個別のスペースがありながら横につながり、程よい距離で気かけ合いやすい長屋。子育て世帯、高齢者、学生まで様々な境遇、世代の人が住む「だいありい」では、ご飯を作り過ぎた時にはおすそわけをしたり、暮らしをゆるやかに共有する。子どもたちの声や自然の音とともに縁側でゆっくり昼寝をする。つくる場、つむぐ屋で趣味に浸る。地域の台所でみんなと食事をする。1人で過ごすこともできるし、誰かと居合わせることできる「いえ」。

「つむぐや」

本、衣服、雑貨などの寄付で集まったお店。

お店の商品はお金での買取、物々交換で取引される。お店のスペースを借りて自分でつくったアクセサリや衣服なども販売できる。

学生は借り放題の図書コーナーがある。地域に住む人のおすすめ本のコーナーが設置されているため、お互いが程よい距離感で関わり合う地域の人々の個性を本を通して感じられる。

主に高齢者の持ち物の整理や地域住民のいらなくなったものが集まり、時代を超えた出会いがある。「つむぐや」を通して、人と人との関わりだけでなく、地域に住む人の思いがつながり、また新たに紡がれていくお店。

「なにもないばしょ」

畳が敷かれているだけの、使い方自由なスペース。

近くにある保育所の子どもたちが気まぐれに遊びにきたり、昼寝をしたりする。

夏になると、自由研究に悩む子どもたちが、頭を悩ませながらキラキラした目でなにかをつくらうとしていたり。

学校帰りの学生たちがここへ寄れば、偶然居合わせた子どもたちとお話したり、遊んだりすることもある。

「ひろば」

池のある広場と、山のある広場。木々や山の穴で秘密基地を作ったり、子どもたちだけの世界を自然の中で自分たちで作れる広場。大人は、虫や鳥の声を聞きながら、ベンチで昼寝をしたり読書をしたり、くつろげる自然の場。秋になったら柿が実って、甘柿なら生で食べて、渋柿ならみんなで干し柿を作る。季節のうつり変わりを感じながら、自然の中で遊び、くつろげる「ひろば」。

